

せんたん
きき
の
り
り
り
清談常盤色香

柳亭種彦
厚田其真作

四

~ 13
3583
4



門 13
3583
巻 4



恋故と辛抱して忍ぢかりまゝかゝつて悪のいの
汚し女外聞ワスレと人ききと重みたる左近が
家破談せぬばあるべからず懐きかへて介抱せしと
縁といふことつみてそと母由の辨みまらせごちの
女房ふりらぶべしごりつらまゝとやつて君も鉄
醬つけさせんとめくろもたりも不用と猶更
らまて目出らと阿房らしくも語とんわや
る腹を抱へつ實捕も孔明も舌と巻ても申さん

35. 2. 2
蔵書

さそあくふ又母上の仰ありいさといを二人がのぞき
 叶へしとありとりバ犬二郎そのあふとぞいさか
 とさやけがやちりきそいしとちきこ又あま
 や。さりとそいあまづ二人が身背ふ腹は是非も
 承知せしとぞこえん。いうる夏さかひん。

三の徳行

お横思ひたるゆら犬二郎お文が密通万ふ一夫ふけど
 らまらぶがやうの夏火放ち物盗むとぞいさか

たる悪行のそく。さそ嫌ふ生質も彼等が為甚
 うからびさあうの時お光も。とそ男あらはひ
 開くふよう便かりいぶる本手ふよきものといま
 さるあるまひ見えぬこそ業腹をれ聊みて怪
 けいひあまら。雪とも墨といひころむ。古の
 みて針と棒やもとりあさんとぞかりひらさ
 好の諸生利欲ふ命ぬ忘る。門人をとふら
 と與へ又あまむきせうてお光といま

かきんと志多きども謹深く行正しきと其のいある
 べもあらばさる程ふ此頃きろと思ひ得たるまあり
 てお光をそようらぬものと夜毎ふきのび合はせま
 せ密ふ一角ふつびてそも似つかへき中きらふあま
 いきこぎあら種なきひてとがめび改てうちあつ
 んも便よみれどえもいと多ぬ賤しきものとも見ぬ
 折々いんぞ加ふと馬耳風ふてさくも気毒なる
 ると説言び一角かきふおつてはさゆりの行かす様出

そあらめと疑ひて正しく證故見てぞ打檻せんと
 いふとくあらだてかきさとりて通ひ来り密々物
 りんとて夜深けて後二人息を殺して物の隙より忍び
 男の来るまゆを見ぬよりりり此夜宵の程を光へ涙ふ
 くもの目まぐ燈を挑てもかかげても指圖く物語の冊子
 ども讀も物うく押遣りて入りふ顔さく入て敷居の
 鉢戴の姫君紅血鉄皿の物語まぐしき親み昔ならむ
 りんと任去落窪のうへとちりふもいづれもく負む方か

勝もつる方くちまは遂小の高位貴人ふ思れ兼らせ
 栄ゆる世ども見ぬいへはまゝの醜女の手筒ふて昔
 今小例なき浮身小て頼所なきあやうもつらふあめ
 故小中将姫のいとき濡衣着しつとも誰の實とせざら
 んらみ著せんと巧む人もあらうあまらうの方れ公
 づひなきも猶かひものうき身や同じく早ら雲雀
 出やく所小捨らまほく行末いらふり行らんや胸
 めごつてむせかへるあまの支つゆかかふるあめぞし

白ふがどくくるつて入来てあま何う涙とよぼして
 ちころきくともあまか何と悲しがりてぞ顔に
 覗くようかき古物語よみて心動かたりしあま
 思やと目も拭ふまゝのき冊子にかきゆりていかに
 いふ夏なきくあまよ小珠しき夏あり奥庭の泉水あ畜
 置八背の河鹿夏ふあぬ此頃毎夜幾度あや
 其声のうらうし時よりの勝まり浄手ふおきて
 二度二度きくしとこよひの殊小暖小空工暗風をりま



びとぐすく勝るべし密山行てきうぐやうもじもじも
 けいひふもおぢて鳴やむべれがじうもてまのびくふ
 行べし九ツの鐘きこがやうてぬき足して出ぬいも
 早く起て此へやの外ふてちいさ記志ぶきこいしてあひ
 づとせん必祓ちて約違へかふかといへ何の心もつる
 その奥ありいつも後夜まで目覚さまごさゆりれ
 かこつりあらじといふはちる後ふとてお文出行ぬ
 ざしきふハ一角お横今や密男来るとうかぐへ後

夜の鐘うちをてくとむりや右て奥庭のらど口自然
 開て頬包きたる男忍び入てお光がへやの戸口よりき
 てかきこいじあるあふきこて其まき植込の内へいお
 光のこくりこととあらぬがお文があひづと心得つくま
 きのまき片手小紙燭とやぬきあーふて泉水の方へ
 ゆくふ人の吹消は如く火きえぬお文が戯れとあひ
 て声もかけず今や河原のちくなくんか文のいづこま
 あらんと物のこめくまこくみるう縁て伺ふ一角ハ今

子よありけるか。あら笑止やとお横が高き。あら
 いらぬものものどりのどりのくちうぐひ居てやう
 けさるものありや。嫌せるものありや。もう又うら
 不儀せしものありやと。うみとひられどこのくまを
 みたらぬ吉又故と。うきまてて手がうか。かの文が
 供して扇尋ひたごかしよや。四糸あつちも喘ぎある
 き。呆子か光の伏てまきまよと。あつまびふみてあ
 かこひちよき。うらむてかひひきんちうきん。

らうてあつませぬ。うらむてかひひきんちうきん
 ちひせらまき。うらむてかひひきんちうきん。あつ
 薄し。あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 ンヤリ。か光あつてあつてあつてあつてあつてあつて
 てもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 ヒヤくつむ。うらむてかひひきんちうきん。あつ
 婦とのくむ六尺の推平と。あつてあつてあつてあつて
 社口人のむちであつてあつてあつてあつてあつてあつて

行どれとぞりひとこまき頭と掻き辛螺と給ぬと祝ふ
間りまき法螺貝とここのひとんがう声ふ耳と肝と
つづたりと猶とつづつはまらうゆぐぞふかりきる中
ふぢうからびもあらずお光入始と魂消えいきと
うせてたが許しとくくと喚びとさくら浅まのき濡衣
きせらととらと更お驚き齒とかみ拳と握りつめて
あきら姉君とかろく契りて河麻きくふ起出たまいと
あらぬ男居一のまふととらく密支と覚と

あらぐ人お支頭と加き義理あつあつとびいふも
よく取あがまんと助とけとと河麻が今頃鳴も
せど又加のふげとととむの音きと友ともいと
れどぞがけたるまいととびととらふ佐するとも
とともあるとけあつととと添んと何くの顔してと
りの〇かて後お光の今は死ぬととととびも深と
あふぎと又及手おとりのとととと今世ととと
弥汚名とととと期ととととあのお光とととと不義ととと

云譯かさふ自害せしを咎まじとの如く人おのらん猶
 耻と志のびおごりへてん月日あまども加りる古又あく
 遂ふとこのあらしむざららんうらふ冤屈る由明ら
 けくあふべし。さうあがら情あやむくハ加の中將姫の
 如き月ふさくわひふりりと死いどまうりまどもえ起も
 上らば聞ふこもりて泣況らう日を送りたり〇加の忍男
 ら大二郎ふてお横とう数枚の黄金とらけとりら又北上
 ふ鴻太郎と仲立してよき正月とまぶしとして吉日と擇む

一用がもと入行加やうくとがくらふ一用いぶがく水
 橋ハ家富く絶の持叅金とゆ王マハセド何とてあ
 の醜婦と娶んとする。こみ足下のかりひ違へあらん
 と咎らば先此書とそとよもかくもれとまへとて
 鴻太郎がかりし書と開き見せて
 加極く後々事承之む波一用の方息女妹と方
 とあり一用かどろきつ。姉妹の文字の錯あらんもえ
 からまじといへが拙者もさゆつふ心つきい故念と

押へば水橋へ人あそこの見識ふあらび由前ふて
 申へいふがふとど美人を好むは小人あり。賢く賢
 とし色と易ふの學者の常我思ふ處あり無塩
 宿瘤の故夏とありむらびやその妹くくと申てい加
 今の對手へまことあらび。男かう。金持をこそとふ
 身持が偏屈で仙基錢の角ある風か光さるふら
 あらへるやうあり督聊四百とぞいふ非びと口ふ
 まうせて勧りると一角へか横等ふあざむられて光

ぞ責打らるる夏日を經るま。そのよのけしきか光お
 文のことばのなとつらくかにかうふ。こままこ例のれ
 等が辟口とあらんと察しりとは忽あられその情お
 こり暇あはさき一むらひて吾愚おしてあのひがゆのふ
 権とやらとむすむ非道とえとやね折あつとさ
 こそへ恨て腹立らぬあが。まて後せんやうあり。又
 かこと合テよきむこ得させん身こそ大夏あを思ひ
 屈まび。保養あふくと慰るるうら。かふるよき媒のこ



とどよまきつげまど。ひや嬉しく。これも仲人呂きて。か
 き百夏まぞつめて水橋とほり並べ。もきとめく。とど
 るお光。尾張ふ在し。とき鴻太郎。こし夏あり。又其頃
 人の語り。此入穀弱々。とともあは。ここの心深く。て。
 人と辱め。行厚くて。義理不達せり。ある時。友達と
 つどよもて。物へもき。帰路俄雨ふ。あひ各傘借て
 さし。つ行折寺の門前。ふ蹲居。こりける耳。順計
 の老女の。蒼子。ふも勝。アて汚く。悪さ。げある。が。ち。ぎ。これ

とどよまき

十五

草履ふて泥水蹴上げく近づき来て端を通る鴻太
即ち傘の内へいつ友達声とそらして外聞する蹴
除けても遣つてもへつひらきかゝる老さらがひつる
人の笠もきびしくぬきとぎつとよそふやい見んあふ
まことちがやとて見苦しともあふびかろうやとらり又
ある時野遊まぶき日のあつて若りのよ月代割せ
と此男痛く福む加りらんぐらうとて手ざとらう
額へかけて加うら一寸斗そぎとむぶ血ひらへくと流れ

てさうと堪がうて櫻花折るのきあつてを疼つけ
らう尋常の人あらまううらうらうらうらものハせえ
うらうらまぶからまうも血のあひつらうらうら我
昨夜燈どかびげ盡しと書讀しや今月代をるあ
ちよきふ忽眠けのきぎうて頭うごうう故とひれ
あや依りしものぞおんごうふ慰めたり又或時夢見
み行くと其女必し飾るう定あつと素顔も洗髪
ふらちああきと仲人ふ問ふとあく生地のみまくれ

美麗びんりと見せ奉らん為なりごとくつらひぬぬの潔けつ
 きき氣性きせいふひひびやと答こたへる實々じつじつと黙もくきて歸かへり
 てのちけいの女にあゝくあゝぬどきりて自らみづかり自慢じまん好このし
 からび顔かほよきふやせる人ひとの大將たいしょうの甲冑かこうのころもき
 ごとせひらかひらごとく。敵目てきめぞつゝも安やすく。隠かくせて
 もあゝつりと危あやふく女にもおのを行おこなひ正ただしからんとし
 も人ひとあゝまづ又またづとあても一生いつせいの安やすくならんこと。色いろ
 又才さいを頼たの中ちゆう。夫をとこを蔑あはれよする故家こけ治ちらび自みづかり醜みにく名なを

たら醜婦しゆうふのあはれと表裏うらせうあつたのむ所ところの親夫おやととのこを
 せぶ徳とくあきまつく人ひとまゝあひて情じやうを尋よせび
 さまづかのづらきんせん本ほん孤こ織おの行ゆきもあ。加からうふ論ろん
 を見みぶきつらう悪あき方かたせよらん。とまれかくすれ。
 此こ後のちせつやきとゆづ。先まづにやきき親おやふ孝かうあつてあ
 らねを尋たづねて人ひとあゝ人ひとせむ道ちゆうあり。このひり
 り。此この三さんの行ゆきを平生へいせいぞ知しる足いることぞ人の加からん。
 ことあゝ人の妻めかけとあらが。加から人ひとあつたまや。又また此こ

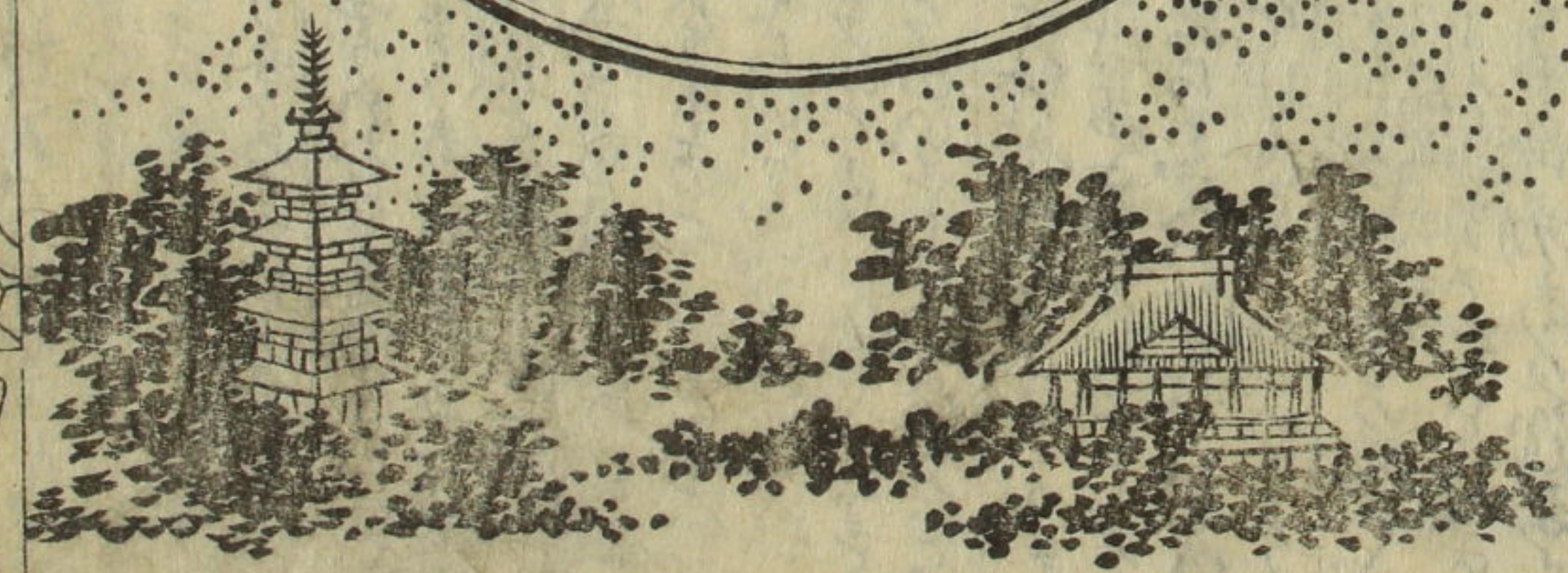
人あらて、こが醜陋を容る、人あらじと其頃既ふを
ひまを今又加しこより我を求むるや、わらわらかきめを
うけ、憂瀬に沈みおのれ枝の涙雨と我をさすけりあり
れまたまひて。せうらんとおめふう。よくもする心ありぬ
ふかせよ。おひ居てきやせんあり。耻を忍びて田舎へ
下りともかともあつちなり。聊のささるもあぐ。あぐぬ国へ
よめるゆてゆ。とそらざとこへ濡衣をうんと疑ひし人
むおのむかきとむ。お定めおそくし縁ともえ

祐ど先も求め父もあやうき人の御ふちをひひらんぬ
あそかり。お横にお光がゆるとあは幸と得んとすもさうい
とあぐりれば、さあぐ障子さうひ立身とごとく醜女とあり
つと求むる人水橋からで外おあうら。殊に二百両のつけ
加ひも不用とあるは大ある利得あり。あめゆうあがりぬく
しき女の一日も早く他家へやらんこそ。家の禍を拂ふか
まごふ非びやと三角ふひ張りまごふがみ争ひ負けな
みあらんと願ひく口あてよあめせんともよくぞいひし。

奥州岩城開伽井嶽
 蔡師如来ハ昔龍宮
 より下りたまひ聖驗
 ありてなるふよりの
 岩城判官政氏公
 御信仰あつて祈
 願所となされし
 政氏公は所持の品
 々別當淨福寺の
 寶物をとりたまふ
 此藥ハ蔡師如来ハ昔
 中傳ハ昔より享保年中
 施藥致されぬ有て
 先祖讓精世弘

御免
藥王丸
 大坂心齋橋博愛町北
 賣弘所 淺井壽堂

藥方祖元 竹内周司
 奥州岩城 大人小兒より一切の妙藥



容男の手前

容男の手前もあふべきやうの氣のしづむ
 仲人口も賺まごころもかやうも志をぬとぬ
 ろあふ心根もこのどくありとどあざりてける
 お光鴻太郎婚禮のまららひ下快のぞらふあり
 ままのの花ゆて實ちまて後編あり

常盤名色香三終

痰血

痰血の病は、肺の熱が原因で、咳や吐血、痰の塊が現れる。...

疾痔

痔疾は、血熱が原因で、肛門の腫れや出血、痛みを伴う。...

中風

中風は、気血の不足や痰湿の停滞による、意識障害や半身不遂。...

神養

神養は、精神の衰弱や神経痛を治すための薬。...

血暈

血暈は、血行の滞りによる、頭暈目眩やめまい。...

毒微

毒微は、皮膚の病や瘡癤を治すための薬。...

下帶

下帶は、白濁や尿道炎を治すための薬。...

小児

小児は、小児科の病を治すための薬。...

本家調合所 大坂三國一風薬 越前屋三右衛門 河内屋重太郎

大坂賣弘所

心齋橋博愛町 越前屋三右衛門 河内屋重太郎

家傳三國一風薬

一服代十六銅 七服百二十四銅

〇うせいのあまのす 〇はつしん 〇けいん 〇のり 〇のり

Table with 4 columns: 取次所 (Location), 京都 (Kyoto), 江戸 (Edo), 堺 (Sakai). Includes names like 近江屋庄兵衛, 加島屋嘉兵衛, etc.

日本一家
小兒万病神
仙廣德丸
價一包百銅
同半包四十八銅

疥癩

小兒の疥癩は、頭・背・手足に生ずる。赤い腫れと痒みがある。此丸を搽くと、速に癒す。

液

小兒の諸病、頭痛・腹痛・嘔吐・泄瀉、此液を飲ませると、立に癒す。

痲瘋

小兒の痲瘋は、皮膚に生ずる。赤い腫れと痒みがある。此丸を搽くと、速に癒す。

諸熱

小兒の諸熱、頭痛・腹痛・嘔吐・泄瀉、此丸を飲ませると、立に癒す。

胎毒

小兒の胎毒は、皮膚に生ずる。赤い腫れと痒みがある。此丸を搽くと、速に癒す。

驚愕

小兒の驚愕、夜啼・驚悸・不安、此丸を飲ませると、立に癒す。

諸蟲

小兒の諸蟲、頭・背・手足に生ずる。赤い腫れと痒みがある。此丸を搽くと、速に癒す。

氣附

小兒の氣附、腹痛・嘔吐・泄瀉、此丸を飲ませると、立に癒す。

驚風

小兒の驚風、頭・背・手足に生ずる。赤い腫れと痒みがある。此丸を搽くと、速に癒す。

本功能書は、小兒の諸病、頭痛・腹痛・嘔吐・泄瀉、此丸を飲ませると、立に癒す。

文政十四年卯孟春
三都書房
東武 西村与八
丁子屋平兵衛
大坂屋半蔵
尾陽 美濃屋清七
河内屋茂兵衛
河内屋長兵衛
浪速 秋田屋市五郎
皇都 山城屋佐兵衛

文政十四年卯孟春

